

「カッコマン・ストーリー」

「#1」

『以下の者は部下の女性社員との飲食を終え、二人でホテルに入り、セクハラ行為に及んだ。当社社員がかかる不祥事件を発生させたことは甚だ遺憾である。当行為は当社のセクハラ防止規定等に違反し、会社の職場環境を著しく阻害するものであり、その責任は極めて重大である。よって従業員規則に基づき三ヶ月分の給与の十分の一を減ずることとする』

これがカッコマンが起こした不祥事に対する処分内容であった。

しかし私は釈然としなかった。このような事件を彼が起こしたことや、また、たとえばそうであったとしても、これしきのことで彼が辞表を提出するとは、どうしても信じられなかったのである。

この会社に入社して二十年以上が経過するが、社内の男女間の問題で退職を余技なくされた事例は聞いたことがなかった。昔と違い、職場内のセクハラ事件では、加害者とされる男性社員については確かに極めて厳格な対応がなされるようになった。しかし、当事者間のプライバシーやデリケートな問題にも触れるため、会社としては最大限の配慮をもって対処しているのが実情であった。処分内容は、厳しくとも、せいぜい配置転換ぐらいである、というのが会社生活の折り返し点をとうに過ぎた私が、これまでに見聞きして身につけた知識であった。それだけに今回の彼の退職は、あまりに唐突であり、私の理解を超える出来事であった。

カッコマンと私は同期入社である。彼と最初に出会ったのは、金融機関の中でも大手の部類に入る、この会社の入社式であった。セレモニーは東京本社の大会議室でおごそかに行われた。その合間の休憩時間に、缶コーヒーをかうために会場を出たところ、廊下の自動販売機の前で彼とばったり顔を合わせた。入社式の緊張感からいつときでも解放されたい思いで、互いに缶コーヒーを飲みながらとりとめのない会話を交わした。短い時間ではあったものの、なんとはなしに気が合った。これが同期の中で最も親しくなった彼とのつきあいの始まりである。

彼と私は対照的であった。私は大柄で武骨、見るからに体育会系であるのに対して、彼はどちらかと言うと小柄で都会的。地方の国立大学を出た私と違い、東京の名門私立大学を出て会話もあかぬけていた。そうかと言って、いやらしさはなく、むしろ控えめでソフトな印象を与える男であった。真面目でひと当たりがよく、誰とでも気さくにつきあえるタイプであり、私も彼のそういう側面が気に入っていた。

ベスト・パートナーというのは、互いに持たぬものを補完し合える仲であると言われてるが、私たちにもそれは当てはまった。敢えて二人の共通点をあげるとすれ

ば、正義感が強く、多少頑固な点があるということだろう。ただ私が体型に似合わず、いざというときに言葉が出ずに逡巡してしまう側面があるのに対して、彼はここぞというときには、上司であろうと部下であろうと、またそれが客先であろうと、毅然とした態度で声を大にして言っただけの勇気と大胆さを持ち合わせていた。私はそういう彼の姿に男気を感じ、うらやましくも思った。

全国に拠点を置く大手の金融機関に転勤はつきものである。私たちもこれまでに住居の移動を伴う転勤を繰り返してきた。当社では本社を中心とする異動のルートをとる者と、もっぱら地方まわりのルートをとる者とに分かれる傾向がある。どちらかと言えば私たちは後者に属していた。もっとも彼の方は、その語学力をかわれて一時期海外で活躍していたことがあったが、子どもが不幸に見舞われ、帰国を余儀なくされたという気の毒な経験もしていた。

会社に長く勤めていれば、いろいろなこともあるさ、と彼とはよく飲みながら話をし、愚痴をこぼしあい、そして励ましあった。同じ支店での勤務経験はなかったが、出張や本社の合同会議で顔を合わせるたびに旧交をあたためあった。まわりを見渡せばライバルばかりの競争社会の中で、こうしてよい関係を保つことができたのは、恐らく互いに先頭を切って出世街道を突き進むエリートではなく、またその逆の落ちこぼれでもなく、ごく平凡な社員であったからだろう。第一次選抜ではないものの、二人とも普通に昇格し、普通の中間管理職になり、いたってじみな会社生活をおくっていた。出世はせずとも、よき友とよい酒を酌み交わすことができれば、このまま平凡に終わってもよいではないか。そのようなことを言い合える仲であったからこそ、長くつき合うことができたのである。それだけに、このような大それた事件を彼が起こしたこと自体、私の想像を絶することであった。

「あのカッコマンが、まさか・・・」

それは彼をよく知る者にとっての共通の思いであると同時に大きな疑問であった。

彼がカッコマンと呼ばれるようになったのは、海外から帰国し、課長代理として関西の大型支店に配属された頃であった。課長代理は他の企業と同様、管理職と一般従業員の間に立たされ、そのパイプ役となり、事実上現場を束ねていかねばならないというハードなポジションにある。自分の職場内の社員たちに目を配るのも大変なところを、彼は関西地区の労働組合の幹部も引き受け、他の職場の後輩たちの悩みや相談にも親身に応じていた。ときに上司とぶつかりあうこともしばしばあった。また後輩の主張が正しいと思われるときは、それが上司と対立する場合であっても安易に譲るようなことはしなかった。挙げ句には上司に「それほど言うならお前が責任をとってやれ！」と言わせるようなこともあった。そしてガッツで乗り切り、成果を出すことが多かった。俄然、下からの信頼度は絶大なものになった。何ごとにも逃げずに立ち向かう凛々しさが若手社員の間で「カッコイイ」と言われるようになり、いつの頃からか彼は「カッコマン」という愛称でまわりから呼ばれるようになった。

「俺みたいなタイプは、上のウケはよくないんだよな」

と、彼は飲みながらぼつりと言ったことがある。

しかし、実際はそうでもなかった。確かに、弱き社員を助け、強き上司をくじく正義の味方、カッコマンと若手から彼が言われることに対して面白く思わない者は上にはいたが、その統率力や指導力を高く評価する上司もいた。また彼は上とのつきあいは悪くなく、特にその豪快な飲みっぷりと相手の話をとことんまで聞いてあげる姿勢は、酒を社内のコミュニケーションの術と心得る多くの上層部との交流の場を作り、彼をアピールする上でも大いに役立っていた。正義感は会社を思っただけの誠実さとして理解され、その侍気質あふれるエネルギーは組織を力強くリードする男らしさとして見られた。上層部に対するウケは決して悪くなかったのである。

はからずも互いに管理職になり、組織を統括する課長職に身を置くことになったが、彼が下から慕われ、多くの信頼を得ていることについては、相変わらず私は太刀打ちできなかった。

社内行事の一環として行われる遊びやスポーツの類では私の方が断然優れていたが、どうにもならないもののひとつにルックスの問題があった。男は三十才代なかばも過ぎると、腹が出て、頭が薄くなり始める者が多い。かく言う私はいずれにも該当した。しかし彼は違った。体型、頭ともに入社時と殆ど変わらなかったのである。さすがに四十才代になってからは彼の頭にもちらほら白いものが見えるようになったが、体型は維持していた。そういうルックスの面も利点となり、管理職になってもカッコマンの愛称は継承されたのである。

暑い夏の最中、彼の退職を知らせる無機質な業務連絡が社内メールで流れてきた。その当時、彼は東京の東支店の課長として赴任してちょうど一年が経過する頃であった。同じ時期に私も近隣の東京西支店の課長として赴任し、互いに頻繁に連絡を取りあっていただけに、この唐突な知らせに思わず席を立ち上がり声をあげて叫んでしまった。

「おい、ウソだろう！」

東支店に問い合わせをするも、彼の退職については誰もが「一身上の理由」としか述べず、まるで箝口令がしかれたかのような様相を呈していた。彼の住む社宅に電話を入れたが留守番電話に切り替わっていた。彼の携帯電話にも連絡を入れたが、反応はなく、仕方なく至急連絡が欲しい旨のメールをその携帯に送信しておいた。そして一週間後、私の携帯電話に彼から連絡が入った。

「お前、どうしたんだよ！ いったい何があったんだよ！」

「申し訳ない。今は引っ越しや身辺整理でバタバタしているんだよ。また落ち着いたら連絡するよ」

「おい、ちょっと待てよ。どこかで会えないか？」

「ごめん。また連絡するから」

「そうか。何か分からないけど、俺でできることがあれば言ってくれよ。必ず連絡をくれよな」

「ありがとう」

と、言うとは素っ気なく電話を切った。

その後、数ヶ月が経過したが彼からの連絡はなかった。その間、私は何があったのか東支店の管理職の連中に聞いてまわったが、明確に説明してくれる者は誰もいなかった。どうにも釈然とせず、こうなったらと部長に面会を求めて単刀直入に問い質した。最も親かった同期のよしみで、ということでやっと聞き出したのが彼の処分内容であった。部長は、被害者である女性社員への最大限の配慮ということで、本件については口外を固く禁じた。そしてそれ以上のことを語ろうとしなかった。

「#2」

私の携帯電話に彼から連絡が入ったのは、すでに寒さが厳しくなる頃であった。決算を間近に控えて会社全体が慌ただしくなり、職場はいつも以上に殺気立った空気に見舞われていた。男女問わず、連日の残業が当たり前のこの時期に終業時刻とともに帰宅する者は殆どいない。懸命に仕事に身を投じる部下に対して後ろめたさを感じながらも、彼等には急用があるからと言い訳を述べて早々と会社を出た。

待ち合わせ場所は横浜のＪＲ桜木町駅であった。ここは、若い頃に彼とよく飲み明かした懐かしい場所でもあった。久しぶりに降り立った駅は、周辺的环境がかなり変わっていた。かつて、人の波は駅の北側繁華街、若しくは馬車道通りや伊勢佐木町の方角でもある西側に流れていたが、今ではランドマーク・タワーを始めとする超高層ビルに囲まれた南側のおしゃれなデート・スポットに吸い寄せられていた。

彼は改札の出口で待っていた。ジャンパーにジーンズ、長髪のその姿は、スリムな背広に七三分けというかつてのカッコマンのトレードマークからはほど遠かった。

「おお、待たせたな」

「おう、行こうか」

何ごともなかったかのように互いに言葉を交わし、まずは腹ごしらえのために懐かしい馬車道通りの方角に歩を向けた。

何年ぶりかで訪れるその蕎麦屋は健在だった。瓶ビールと、その店自慢のざる蕎麦とうどんの合い盛りを注文した。

店では本題にはまったく触れず、とりとめのない話に終始した。髪型は変わったものの、聞き上手のいつもの柔和な表情に、私は彼が退職したことをつい忘れそうになった。

合い盛りを平らげると店を出た。まだ八時にもなっていなかったが、馬車道通り周辺は閑散としていた。外は今にも雪が降りそうなくらいに冷え込み、我々は足早に次の店を目指した。

通りから少し入った狭い路地に、その店は相変わらず控え目な看板を掲げていた。扉を開けると、ほっとするような温もりに包まれた。ここも以前と変わりはなかった。カウンターの端にはこちらより少し若そうなカップルがいた。我々は反対側の端に腰掛けた。

「お久しぶりですね」

と、マスターは物静かに言うと、残り半分ぐらいになったスコッチのボトルをカウンターに置いた。その首にはボトル・キープ用のネーム・タグが吊され「カッコマン」と記されていた。

「へー、まだボトルを残してもらっていたんですか」

私は感激して言った。

口数の少ないマスターは一瞬微笑むと、無言でロックをつくり始めた。

軽く流れるジャズ・ナンバーは、ホームズの時代にいざなうかのような店内の造りとうまくブレンドされ、落ち着いた空間を醸し出していた。

我々は無言のまま乾杯した。

「で、なんでこうなっちまったんだ？」

ロックをひとくち喉に流し込み、少し間を置いてから私は尋ねた。

「ウンコだよ」

カウンター奥のボトルの陳列棚を眺めながら、ぼそっと彼はつぶやいた。

「ええ？」

「ウンコだよ」

今度はこちらを向いて、笑みを浮かべながら同じ言葉を吐いた。

「ウンコって、クソのことか？」

若干声が高かったため、カップルが怪訝な顔をしてこちらを見た。

「あっ、失礼」

私は慌てて彼等に軽く頭を下げた。

「そうだよ。クソだよ。大便のことだよ」

「おい、さっぱり分からないよ。ちゃんと説明しろよ」

「おお、説明するよ。長くなるぞ」

「おう、今日は徹夜で聞いてやるよ」

「そこまで長くはならないよ」

と、言うとは彼はひとくちロックをぐいっと飲み込んだ。

「俺の職場にいたサクラさんを知っているだろう？」

「ああ、女子社員だろう。若いのによくできるという評判だよな。お前も自慢してたよな」

「将来の女子社員のリーダー候補だよ。でも確かに優秀なんだけど、優秀なだけに自分の欠点に気付かなくなるということも、いつか言ったことあるよな」

「ああ、覚えてるよ。でも、それは優秀な社員にはありがちなことで、若いうちはあまり気にせず先輩にどんどん挑むような生意気な姿勢も必要だってお前が言ってたんじゃないか？」

「そうだよ。しかし管理職としては、言うべきは言う、注意すべきは注意して本人の能力を上手く引き出さないといけないんだよ」

「そこが、難しいんだよな。誉めることはできても、諫めるのは苦手だよ。でもカッコマンにとってはなんでもないことだろ？」

「なんでもないことはないけど、まわりが言いにくいことを相手にビシッと注意して素直に聞いてもらうためには、それなりの信頼関係をまず築くことが必要なんだよ。それなしでは単にガミガミおやじが一方向的に文句言っているのと同じだからな」

「そこがカッコマンのすごいところなんだよな。お前は部下一人ひとりと本当によく人間関係をつくっていたよな。俺には真似ができないところだよ」

「男子であれ女子であれ、部下については分け隔てなく心の交流を図ることが組織のリーダーとして求められる。そう思い込んでいたからな」

「結構、飲み食いに金もかかっただろう？」

「ああ。でもそれで気持ちのいい職場になれば安いもんだよ」

「男子は別として、女子社員と差して飲みに行くのは最近は御法度だよな。しかし、

そういう問題のある飲み方にならずに全員の面倒を見るなんざ、やはりカッコマンしかできないよ。自分の部下以外の悩みも聞いてあげてたんだろう？」

「ああ。会社からすれば、アウトロー的なやり方なんだろうけど、実際それで何人も救ってきたからな。鬱状態の者、上司からセクハラや人権侵害を受けている者、やばい事件に巻き込まれた者、いろいろいたよ。話を聞くだけで、救われた気分になる者が多かったけど、場合によっては組合や人権室につなぐようにアドバイスしたこともあるよ。特にトラブルの元凶が将来を約束されているような上司ということになるとやっかいだよ。でも彼等のしたたかなところは、問題が露見しても内々で処理してしまい、出世コースからはずれないところなんだよな」

「納得感ないよな」

「どこの組織もそんなものじゃないのかな。俺たちとは縁のない世界だよ。でも少なくとも自分たちの職場では気持ちよく働きたいよな」

「それでサクラとの信頼関係を築く必要性を感じたのか？」

「そうなんだけど、それは俺だけじゃなくて、職場の何人かが感じていたことなんだ。特に課長代理のトキオ君や彼女の指導員役をしていたフジさんも同様の思いを持っていたんだよ」

「確か二人とも、お前と同じ時期に赴任してきたんだよな。新しい職場に有能な後輩がいるというのはやりにくいもんだよな。おフジさんはお前がお墨付きを与えた女子リーダーじゃなかったか？」

「極めて優秀な社員だよ。サクラさんより少し年令は上だけど、将来的には間違いなく彼女とサクラさんが部の中心になって組織を引っ張っていくという確信があったよ。それだけに彼女たちの能力をうまく引き出すことが俺の使命だと考えていた」

「おフジさんとはうまくいったのか？」

「フジさんは努力家なんだよ。プライベートな面でもいろいろと苦労しているひとなんだけど、それを乗り越えてよくやっているよ。俺や課長代理にきめ細かく情報をつないでくれるし、課の問題についても忌憚のない意見を言ってくれた。結構ユーモアもあるし、多少艶やかな大人の会話もできるひとだよ。一度食事をしながら彼女の話

をじっくりと聴いてあげたことがあった。そのとき彼女は涙を流していたよ。また機会があれば聴いてくださいと感謝された。彼女との信頼関係は申し分ないと思っていたよ」

「いいなあ。じゃあ、彼女とは楽しく飲みにいけたんだ」

「おい、言っておくけど、うわき気分で飲みにいってるんじゃないぞ。話の内容によっては職場や会議室ではできないものもある。相手の心を開くためには場所を選ばないといけないこともある。そりゃ、暗い話より、明るい話の方が楽しいことは確かだよ。男と飲みに行く場合だってそうだろう？」

「わかってるよ。それがカッコマンのすごいところなんだよな」

私は片手で彼の肩をたたいた。

「フジさんからは俺や課長代理の携帯に息抜きのクイズ・メールなんかが入ってきてたよ。そういうちょっとしたセンスが職場の人間関係をうまくしていくんだよな。俺もそのメールを娘に見せたり、クイズを家族で楽しませてもらったりして、負けずに返信メールを送ったよ」

「お前は本当にまめだよな」

「送ってきたメールに返信するのは礼儀だよ。それはともかく、彼女もサクラさんの指導については悩んでいたんだ。特に客先から苦情が入ったりで、なんらかの手を打つ必要があったんだよ。そこでフジさんとゆっくりと打ち合わせをすることにしていたんだけど、互いのスケジュールがかみ合わず、サクラさんとの話を先に進めることにしたんだ」

「おお、それでサクラと飲みに行くことになったんだな」

「ああ、お前も知っている新宿の割烹トキに行ったんだよ」

「あそこは日本酒の店だよな。彼女は酒を飲むのか？」

「本人は酒が強いと聞いていたからそこにしたんだよ。彼女と、まともにゆっくり話すのは初めてだし、やはりいい酒を飲むにこしたことはないからな」

「で、まともな話はできたのか？」

「ああ、いろいろ話をしたよ。自分が先輩より出来ると思い込んでいる社員は男であろうと女であろうと、気が強くて生意気なタイプが多いんだけど、仕事を離れば、皆それなりに苦労しているイイやつらなんだよ。彼等の話を親身に聞いてあげ、こちらでも上司というより実社会の先輩ということで自身の経験を語ってあげれば、職場内で感じている互いの距離も縮まるし、信頼関係も深まるんだよ」

「お前はいろいろ経験しているから話題も豊富だよな。例の海外の話もしたのかい？」

「ああ。ワンパターンだけど、誰もが興味をもって聞いてくれる話題だし、うちの会社でもこんな世界があるんだということで、何かを感じてもらえるからね」

「それじゃあ、結構盛り上がったんだな」

「うん。予想以上に盛り上がって、酒もかなり入った」

「そんなに飲んだのか？」

「二人で日本酒を一升。最初のビールを入れれば一升半は飲んだね」

私は思わずウィスキーを吹き出しそうになった。

「そりゃ、むちゃくちゃ飲んでるぜ。彼女はそんなに強いのか？」

「強い。あんなに強い女性は初めてだよ」

「どっちが沢山飲んだんだ？」

「ほぼ互角だったけど、彼女の方が強いだろう。途中から俺も苦しくなってきたからな・・・」

「それを無理して飲んだのか？」

「若い頃ならなんともなかったんだろうな。男の部下で、酒で負けた者はいないのに、女の部下で負けるわけにはいかないという意地だよ」

「カッコマンの意地かよ……。それで？」

「彼女は平然とした様子だったよ。俺の方も平静を装っていたけど、腹の調子が悪くなって店の便所に入ったよ」

「それでクソをしたという話か？」

「クソをしてちょっと落ち着いたんだ。それで店を出ることにした。もちろん俺が精算したよ。話はここからだよ」

彼はロックをひとくち飲んだ。そして大きくため息をつくと続けた。

「#3」

「彼女は楽しそうにしていたんだ。職場では見ない笑顔を見せてくれたんだよ。こちらがうまいと思っても、大方の若手社員にとって上司と飲む酒はうまくないもんだ。だから彼女の笑顔を見て俺も嬉しくなった。最初は駅の方に向かっていたけど、話がはずんでもう一軒行こうということになったんだ」

「それで方向を変えたのか？」

「ああ。あれだけ飲んで平然としている彼女を見て、俺はもっとカッコいいところを見せようという気になったんだな。それでタバーン・クラブに向かうことにした」

「あのオールディーズの生バンドがいるライブ・ハウスだろ。知ってるよ。でも割烹トキからちょっと距離があるんじゃないか？」

「俺のボトルが入っているし、酔いを醒ましながらブラブラ歩いていけば大したことはないよ。でもな……」

「でも？」

「歩きながら腹がやたらと張ってきたんだよ。それでちょっとケツの力を抜いてガス抜きしようとしたんだ。それがな……」

私は真剣に話す彼の表情を見ながら、次第に可笑しくなってきた。

「ガスじゃなくて、液状のやつがズロツと・・・」

彼には申し訳なかったが、私は必死で笑いを嚙み殺した。

「ヤベー！と、思っただけの力を入れたよ」

「わっはっはっはっ」

もうこらえきれなかった。

「そういうことってあるだろう？カッコつけようと思っていた彼女の前で俺は情けなくなってきたよ。パンツに染みこんだのは間違いなかった。ひょっとしてズボンまでいってるんじゃないかと気が気じゃなかった」

「我慢できなければ、どこかの便所に入ればよかったのに」

「今まではこれしきのことで我慢できないことはなかったんだ。肛門に筋力があつたからかもしれない。でもな、実はその一ヶ月前にも遅くまで飲んで腹の調子を悪くしたことがあったんだ。かろうじて家にたどりついたものの、便所の中で間に合わずにパンツの中に一斉放射してしまったんだよ」

「うわっはっはっはっ」

私は思いっきり笑った。身に降りかかった災難をこのような口調で語るカッコマンの姿をかつて見たことがなく、何か新鮮に感じるものがあった。

「笑ってすまん。奥さんも驚いただろう？」

「便器の中で必死になってパンツを洗ってから惨めな思いでドライヤーで乾かしたよ。夜中にごそごそやっている姿にかみさんも呆れてたよ。でもあのときは家の中だったんで助かったけど、今回は違う。彼女の前でそんな姿を見せたらもう上司として、男としておしまいだ。彼女との会話も上の空になった。そのうち気分も悪くなってきて、こりゃタバーン・クラブまでは持たないなという悲壮感に苛まれた。それで・・・」

「それで？」

「俺は気まずい思いで『ちょっとトイレ借りてくる』とボソッと言って飛び込んだん

だよ。ホテルへ。お前も知っていると思うけど、あの辺はラブ・ホテルなら沢山あるからな。ホテルのロビーに行けば便所ぐらいあると思ったんだよ」

「・・・」

「しかし、そんなもんなかった。俺は焦ったよ。あるのは各部屋の写真を飾ったボタンのついた案内板だけだった」

「お前、初めてだったのか？」

「情けないだろう・・・。俺は要領が分からず、ケツに力を入れながら案内板の前をうろうろしたよ。もうやけくそでボタンを適当に押して、表示された部屋に向かったんだ」

「・・・」

「幸い部屋の前にたどりついたときには腹の調子は収まってきていた。で、扉を開けて靴を抜いで、ホッとして後ろを振り向いた。そしたら、ギョッとしたんだ」

「どうした？」

「なんと彼女もついてきてたんだよ。彼女は俺が脱ぎ散らかした靴を丁寧にそろえてくれていた。その落ち着いたしぐさを見てますますあせっちまったよ。ああ、彼女のほうが上手だってね」

「・・・」

「部屋にはソファとベッドがあって、彼女はにっこりと微笑んでソファに座ったよ。腹は小休止していたので落ち着いて便所にいける状態になったけど、そこで躊躇したんだ」

「なんで、また・・・」

「考えてみろよ。ホテルの部屋に入っていきなり便所で賑やかにクソなんかしたらカッコマンのイメージぶち壊しだろう。ここは男として面目を保たないといけない。馬鹿みたいだけど、俺は自分のみじめな姿を見せたくないのと、彼女になめられたくない一心で、精一杯カッコつけようとしたんだ」

「どうやって？」

「ケツに力を入れながら、クソのことや動揺を悟られまいと、きざな二枚目を演じようとした。冷蔵庫からウーロン茶を差し出しながら、俺はこういう場所にはなれてるんだぜ、みたいなセリフを吐いていたんだ。でも頭の中は最高にパニックっておろおろしていた。自分が何を言っているのか、何をやっているのか分からなくなっ
た・・・。支離滅裂な状態だったよ」

「それで？ベッドにいったのか？」

「違うよ。そこを出たんだ」

「出たあ？ああ、そうか。ケツにクソついてりゃ、それどころじゃないよな」

「ああ・・・。十五分もいなかったと思う。とにかく出て二人で駅に向かった。俺はもう敗北感に包まれてがっかりきてたよ。恐らく真っ青な顔をしてたんだろうな。彼女は、今にも吐きそうな俺の様子を見て気を遣ってくれたようだ。ひょっとしたらクソの臭いに気づいていたかもしれない。どちらかと言うと彼女に駅まで送ってもらったようなもんだよ。俺はもーろーとしながら手を振って駅の改札で分かれた。そこで一気に来たんだ」

「何が？」

「こらえていたものが、上と下から。なんとか駅の便所にかげこんでセーフだったが、一時間は個室から出られなかった。最高に惨めだった。初めてだよ、こんな経験をしたのは。そして吐きながら、彼女に負けてしまったという挫折感とくやしさがこみ上げてきた。このざまはなんだ。これでも男か？あまりにも情けなくなって、これからどうやってリカバーしたらいいのか思い詰めたよ」

彼はふーっとため息をついた。

「彼女を諭すどころか逆になめられるような醜態をさらしてしまい、とにかく彼女との関係を上司と部下との関係にリセットせねばならないと思い込み、翌日から本人に働きかけたんだ。社内メールで彼女に改善すべき点を伝えたり、一層責任感を持ってもらうために、課の抱えている問題点を興味深く聞いてもらえるよう口頭で説明したりした。これまで以上に指導したつもりだったんだけど、それが結果として裏目に出ってしまったんだ」

「嫌われたな。でもさ、彼女にしてみればお前に不快な思いをさせられたという気持ちだったんじゃないか。それをくどくど言われたりすれば、むしろ益々不快になって

避けたくなるんじゃないか？」

「そうなんだよ。俺を無視するようになってしまった。そこで、この状態を打開するためには、もうフジさんに間に入ってもらうしかないと考えた。彼女には一度時間をかけて外で打ち合わせたい旨を持ちかけたんだ。彼女も了解してくれたんだけど、忙しくてなかなか実現しなかった。そうこうするうちに、課内で事件が起きた」

「事件？」

「サクラさんと飲んでから約一ヶ月ぐらい経った頃だよ。ある些細なことで、彼女が俺に報告を怠ったことがあったんだ。大したことじゃなかったんだけど、俺もここでビシッと言っておかなければならないと思って大声で叱ったんだ」

「出ましたね。カッコマンの鉄拳が。お前は切れると本当に怖いからな。でも、それが信頼関係を築いていくんだよな」

「お前も知っての通り、地方支店ではよくやった指導法だよ。でも当課では初めてだったんだ。たまたま俺の机の下に置いてある緊急避難用ヘルメットのひもに足がからまって、持ち上げたら、机を蹴飛ばしてどえらい音を出してしまった。フロア中がびっくりして当課の女性たちはパニック状態になっちゃったんだ」

「都会ではそういうのに免疫できていないからな」

「サクラさんもショックを受けて大声で泣き出した。そこへフジさんが彼女を庇うようにして間に入り俺を見たんだ。そして彼女と一緒にロッカー室に向かった。てっきり俺はフジさんがフォローしてくれるものと思い込んだんだ。その騒ぎがあったのは夕方六時頃だったんだけど、俺と課長代理のトキオ君はその時間に約束があったので、後はフジさんに任せて会社を出た」

「・・・」

「それが金曜日のことだった。トキオとは休み明けの月曜に課内ミーティングを開催して、俺が叱った趣旨をメンバー全員に説明することを打ち合わせていた。そして月曜日はいつもの通り、彼と俺が真っ先に出社して、その日のミーティングの下打ち合わせをしていた。すると部長と部長代理が顔色を変えてやってきて、すぐに部長室に来いと呼ばれた。俺はてっきり金曜日の騒ぎのことだと思った」

「そうじゃなかったのか？」

「部長は震え声で『お前はとんでもないことをしたな。どう責任をとるつもりだ!』と怒鳴り、代理は『何人の女性に被害を与えているんだ!とんでもないやつだ!』とばけものでも見るような顔つきで吐き捨てるように言った」

「どういうことなんだ?」

「つまり、休日にサクラさんから被害届が部長宛に提出されたということだよ。内容は俺が彼女を強引にホテルに連れ込みレイプしようとしたというセクシュアル・ハラスメントの被害だよ」

「なんでそうなるんだ?」

「部長も代理も完全に俺を性犯罪を犯した異常性格者のように見ていた。レイプできなかったことを根に持ってストーカーのように彼女につきまとい、挙げ句は彼女を罵倒した狂人だと。そして俺を遠ざけるような目つきで『とにかく今すぐに家に帰れ。職場の女子社員全員がこんな上司のもとでは仕事はできないと言っている。彼女たちにはそこを無理して出てきてもらうようにやっとな説得したんだからな。連絡があるまでは会社に絶対近づくな』と俺に命じた」

「何も反論しなかったのか?」

「ホテルに入ったことは事実として認めたけど、レイプは否定した。でも信じてもらえなかったよ。結局その日が俺の会社生活の最終日になったんだ」

「まっすぐ帰ったのか?」

「ああ。まっすぐ帰った。かみさんはえらい速く帰ってきたんでびっくりしていたよ」

「奥さんにはなんて言ったんだ?」

「全部順序を追って話したよ」

「どうだった?」

「初めは呆れて口がきけない状態だった。それから暫く寂しそうな顔をしていた。そしてひとこと言ってくれたんだ。『あなたを信じる』って」

「いい奥さんだな……。それで会社からはなんて言ってきたんだ」

「#4」

「俺もこれまで逆の立場で部下のトラブルをいろいろ見てきたし、対処してきたけど、まさか自分がこうなるとは思ってもみなかったよ。でも、何があったのか、よく説明すれば会社側も分かってくれると思ったんだ。と言うのも、自分が部下のトラブルに当たるときは必ず彼等の本音を聞き出すようにしていたからね。なかなか会社では言いづらいことも、場所を変えたり、彼等の家まで行って親身に聞いてあげれば、その奥底にある悩みや深い心の傷跡に触れることができる。まずは当事者をよく理解しなければ適切な対応は図れないだろ。特に加害者とみなされた者については慎重にしないと、本人の全人格まで否定することになりかねないからね。でもね、実際俺が当事者になって分かったよ。そんなことをする上司はこの会社では希だということをね」

「部長や代理からは何も言ってこなかったのか？」

「代理からは何回か仕事の問い合わせが入ったけど『本件はしかるべく担当部署で対応を検討しているから、そこから連絡があるまで待ってくれ。いやいや、君がこんなことをしてかすとは思わなかったよ』という話だけで、個別に事情を聞きたいなんてことはひとこともなかった。もう仕事の迷惑だし、お前とは話すのもいやだ、と言わんばかりだったよ。俺も待っててもしょうがないので、彼から人事部のヒアリングが三日後にあるという連絡を最後にもらったときに一回だけ言ったんだ」

「なんて？」

「自分は本音を話してません、とね」

「そしたら？」

「彼は言ったよ。『あっ、そう。それは今度のヒアリングで説明してくれ』とね」

「ちょっと冷たいな。でも俺もあの代理を知っているけど、そんなひとには見えないけどな」

「それは気心知れた者同士であれば、ということさ。俺はこの職場に来てまだ一年だし、部長や代理のように本店を経験したキャリア組でもない。初対面の部下よりも、昔から馴染みの部下の方が信頼度が高いのさ。でもそんな姿をお前は自分の職場で見せてるか？ 転勤してきたばかりの部下の前で、露骨にその前任者と電話で遊びの話をしたり、過去の話をやたらと繰り返してあてつけのように懐かしがってたら、本人はどう思う？ 俺はそれだけはやらないように心掛けてきたつもりだけど、全く無頓着な

上司がいるということをこの部署に来て知ったよ。それで思ったよ。この部長と代理とも、もっと前に知り合っていたら、少しは違う対応をしてくれたのかな、とね」

「じゃあ、そのヒアリングがあるまで誰とも話をしなかったのか？」

「ああ。完全に全人格否定されて、ばい菌のような存在になったんだろうな。誰も接触しがらなかったようだね。それでも、カッコは悪いが、クソのことを始め、あのときの自分の状態をありのまま話せば理解してもらえと思った。そういう思いでヒアリングに臨んだんだ」

「ヒアリングって、どんな感じですか？」

「本店の会議室に呼ばれたよ。入るとテーブルがコの字に組まれていて、俺の座らせられた席の正面に本店人事部の管理職と社内人権室の室長、右側に支店総務部の管理職二名、左側に当部の部長と代理が座っていた。ヒアリングというよりも糾弾会という雰囲気だよ。まあ、人権室以外は全員顔馴染みだったからさほど緊張はしなかったけどね。話せば分かってくれるだろうと思っていたし、彼等もそんなに時間はかからないと最初は思っていたんじゃないかな。でも実際はそうじゃなかった」

「というと？」

「人事部が『それでは始めます』と言って進行兼詰問役になって切り出した。『では今回提出された二件のセクハラ事件について貴方にお伺いします』とね」

「二件？」

「そう二件だよ。俺も最初はよく分からなかったんで聞き返したよ。すると『サクラさんの件とフジさんの件』だって言うんだよ」

「ええっ！」

「俺も、フジさんの件はなんなんですか？と思わず尋ねたよ。そしたら彼女もサクラさんと同様に俺から執拗に誘いを受けて不快な思いを抱いたということだったんだ。無理に食事につき合わされ、その後も自分の携帯になれなれしいメールを流されて困ってた。食事の後にも二次会に誘われ、危険を感じて断ったとか、とにかく俺があらゆる手を使ってセクハラ攻撃を彼女に仕掛けていたということなんだよ」

「なんなんだ、それは？フジさんはお前がもっとも信頼していた部下だったんじゃないのか？」

「だから驚いたんだよ。彼女だけは俺を弁護してくれる唯一の頼みの綱と信じていたからな。そりゃ砕けたやりとりをしたり、遊び感覚の会話をしていたのは事実だよ。でも彼女からそういうアプローチがあったのも事実で、その場で彼女から俺に入った携帯メールの内容を出席者全員に見せたよ。でもな、その言葉を聞いて思ったよ・・・」

「どう思ったんだ？」

「この勝負は俺の完全な負けだ、とな。どうあがいたって勝ち目はないとね。俺はこれまで組合時代を含めて、逆の立場でいろんな女性の人権に関わる相談にのってきた。そしてセクハラの対応策としては『不快』を感じたことを主張して、人権室や組合に申し入れることをアドバイスしてきた。本人が不快と感じればそれでセクハラは成立する。そんな自分が糾弾を受ける側になるとは思わなかったけど、それだけに、俺がどう解釈しようとフジさんが不快と思ったら、もう否定しようがないことはその場で分かったんだよ」

「・・・」

「もう、どんな言い訳も通用しない。俺は二人の部下である女性にペテン師のように同じ話題で誘い、次々と手をつけ、社内の全女性にとってもっとも不快な危険人物のレッテルを貼られた。それは永遠にはがれることはない。そう思ったら覚悟はすぐにできたよ」

「覚悟・・・」

「そう。もうあれこれ、ぐだぐだ言い訳や言い逃れに徹するような情けない姿は見せまい。男として、カッコマンとして潔く散ることをね。切腹に臨む武士のような心境だよ」

「サクラさんとのことは何も言わなかったのか？クソのことも？二人ともべろべろに飲んでいたことも？」

「そんな子どものような言い訳を彼等が信じると思うか？ひとの内面に触れようともせず、頭ごなしにひとを犯罪者扱いにして、さっさと処分を決めたがっている連中が。ああ、飲んだ量も言わなかったよ。今更そんなことを言ってもしょうがないし、なんか彼女を女々しく責めることにもなるからな」

「お前はそこまでしてカッコつけようとしたのか・・・。で、容疑を認めてしまった

のか？」

「フジさんとの件は、セクハラの意味は否定したよ。でもこれまでの会社側の指導を無視して軽率な言動に及んだことは事実として認めた。お前が言ったように管理職が女性社員と二人で飲みに行くのは御法度だもんな。サクラさんの件については・・・」

ここまで話すと、彼は考え込むように沈黙した。私も黙って自分の手許のグラスを見つめた。暫くすると彼は続けた。

「俺は前に座って自分を糾弾する六名を見ながら思ったんだ。ああ、これが当社を代表する優秀な社員の一団なんだな、とね。会社としての建前だけに目を向け、社員の人間としての本音に触れようとしな。会社として責任をどうとればよいのか、自分たちはどう動けばよいのか、それだけを考えている」

「・・・」

「俺はかつて、そのうちのひとりに女子社員をコンパニオン代わりに扱うことを問題提議したことがある。そのときなんと言ったと思う？昔からやっているから気にするなだよ。日頃セクハラ指導をする立場の者が、飲み会では聞くに絶えない女子社員の品評会をやっている。糾弾する側にこういう人間がいるんだよ。一方で糾弾される側は汚いゴミのように扱われ、彼が人間であり、ひととしてどのような心理状態にあるか考えようとしな。皆こいつの処分を早く決めて、ここを切り上げたいと思っている。俺は彼等の手許に退職届けの用紙があるように見えた。容易周到だなと思った。そこまで考えたらゴミとしての最後の意地を示してやろうと思ったんだよ。カッコマンの最後の意地さ」

「どうしたんだ？」

「サクラさんとホテルに入った事実は認める。でもそれは糾弾を覚悟の上で、ここにこうして皆さんの前に立たされることを望んで起こした行為だと演説を打ったんだ」

「うほー、派手にやったな」

「ああ、皆、目を丸くしてぶったまげてたよ。部屋中に緊張感が走るのが分かった。いかにそれまで俺に関心がなかったかということも分かったよ。それからさ。やっと自分に目を向けてくれたのは。俺はこれまで会社に対して抱いていた疑問や不満を洗いざらいぶちまけた。俺が相談を受けた人権問題や納得感のない人事異動。派閥に片寄った閉鎖的な昇級事例。家族にまで及ぶ社内のいじめの実態、自分の子どもの身に

起こったことも・・・」

「内部告発のようなもんだな。具体的な名前もあげたのか？」

「そうさ。俺は盛りだくさんの告発をするためにこの場を求めたんだ。こうなって本望だと言ってやった」

「連中、驚いただろう？」

「ショックを受けてたよ。そのうちのひとは『おいおい、俺は派閥に属してないぜ』とトンチンカンなことを言い始めるし、具体的事例については『君は一面しか見てない』と逆に言い訳に徹する始末だよ。今更、切腹を示唆している相手に向かっておろおろすることもないだろうと思ったね」

「でもさ、それが事実であればサクラさんとはどういう関係があるんだ？」

「それはもっともな疑問で、人事部も『貴方が会社に対して不満があったことは分かるが今回の事件とは関係ない。結局は貴方がサクラさんをレイプしたいがために、そのようなこじつけを考えたんじゃないか』と切り返してきた。でもな、人格をずたずたに否定された者が死ぬ前の最後の手段として、自分を理解してもらうためにはそう説明するしかなかったんだよ。会社はひとで持っている。自分はこの二十年以上、会社の従業員のために陰ながら尽くしてきた、ということを最後に分かって欲しかったんだよ」

「カッコマンとして尽くしてきたもんな・・・」

「『お前が黒幕だったのか。陰でこそこそやりやがって』という反応もあったよ。でもさ、建前だけが重んじられる会社生活を皆が強いられているからこそ堂々と本音を出せない。本音に触れようと思ったら、どうしても陰で触れるしかないんだよな」

「お前の言い分は分かってくれたのかい？」

「とりあえず理解は示してくれたようだけど、彼等とはんでもない展開になって戸惑っていたよ。そして最後に震え声でこう聞かれたよ。『このような騒ぎを起こして貴方は管理職としてどのように責任をとるつもりですか』とね」

「なんて答えた？」

「にこっと微笑んで答えたさ。ここまで来た以上、自分もこの会社に居ようとは思ひ

ません。身を引く覚悟はできてますとね」

「連中の反応はどうだった？」

「#5」

「彼等の求めていたのは俺のこの言葉だったんだ。部屋中の張り詰めた空気が一気にゆるんだよ。やれやれ、これで終わったとな。俺も終わったと思ったよ。それからもの見事に退職届けの用紙がすぐに手渡された。まあ、会社側がそれを受理するかどうかはすぐには決まらないという一応の説明があったけどな」

「・・・」

「それから、そこで今まで無言でやりとりを聞いていた人権室の室長が言ったんだ。『貴方が今、述べたことを全てここで記録に残してください。人権問題、人事問題全てをです』とね。これを聞いて他の出席者はなぜかギョッとしていた。何にギョッとしたのかは分からないけどね。そのペーパーがどのように使われるのか詮索してもしようがないけど、何かの役に立てばいいと思ったよ」

「全部書いたのか？」

「ああ。部屋にパソコンを持ってきてもらって、皆さん同席のもとで記録にしたよ。原稿は何回か読み合わせをして修正や付け加えも行われたよ」

「サクラさんのレイプについてはどうした？」

「レイプの意思がなかったことについてはどうしても信じてもらえなかった。そこで『関係を持ちたかった』と記したんだ。彼等は肉体関係と解釈したようだけどな」

「お前は？」

「信頼関係のつもりで書いたよ」

彼の空いたグラスをマスターがとると、手際よくロックをつくり手許に差し出した。

「全ての作業が終わったときはもう六時間以上が過ぎてたよ。外は真っ暗で、皆さん、まさかこんなに遅くなるとは思っていなかったようだね」

「すぐに帰ったのか？」

「ああ、俺は帰ったよ。頭の中には何もなく、全て終わったという気持ちだった」

「奥さんはどういう反応だった？」

「彼女は冷静に受け止めてくれたよ。でも娘には退職のことを俺から直接説明してやって欲しいと言ったんだ。彼女は俺の転勤で振り回されっぱなしだったからな。社宅もすぐに出ないといけないしね」

「娘さんの反応はどうだった？」

「彼女と応接のソファーに向かい合って座り、改まった調子で告げたんだ。お父さんは会社をやめることにしたんだよ、とね。そしたら・・・」

「そしたら？」

「彼女が突然顔色を変えて立ち上がった。そして大声で叫んだんだ。『あんたは何カッコつけてんだよ！あんたは私のことをこれまで何も考えてくれなかった！あんたが会社をやめて私はどうなるんだよ！どうなっちゃうんだよ！』とね」

「彼女はいくつだい？」

「十八才だよ。これまで各地の学校を転々とさせ、なんとか予備校に行き始めた状態だった。悩み抜いて、必死で生きてきたんだ。彼女の表情は俺に対する憎悪の念で一杯だった。初めて見る顔だった」

「・・・」

「そして、彼女の顔を見ていたら、俺の目から涙が出たんだ。止めようと思っても止まらなかった。どんどん、どんどん溢れ出てくるんだよ。そのうち俺は床に座り込んで声をあげて泣いていた。こんなこと初めてだったよ。人前や家族の前でだって泣いたことがないのにさ。もう三十分ぐらい、そのまま涙を流していた。フローリングの床には涙の水たまりができてしまった」

「・・・」

「そしたら、娘が声をかけてくれたんだ。穏やかに『お父さん、これからどうするの？』ってね」

「なんて答えたんだ？」

「お父さんは別の仕事を探すよって言ったんだ。そしたら『だめ。お父さんは仕事に行かないで。家に居て。私のそばに居て』と言ってくれたんだ。彼女の顔を見たら、いつもの優しい笑顔になってたよ」

「お前、いい家族を持ったな」

私は一瞬、自分の目頭を押さえた。

「てなこと、俺は未だに無職なんだよ」

彼はにこっと笑うと、ロックをひとくちぐつと飲んだ。

「しかし、引っ越しとか大変だっただろう」

「ああ、引っ越しもそうだけど、それ以外にも結構忙しくなったんだよ」

「何があった？」

「かつて悩みを聞いてあげ、助けてあげた別の部署の女子社員が俺の事件のうわさを聞きつけて自宅に電話してきたんだ。退職することを伝えたら、泣きながら思いとどまってくれって言うてくれたんだ。ありがたかったよ。そのうち方々から電話やら、手紙やら、メールが殺到したんだ。かつての俺の部下もいたし、組合時代に救ったひともいた。俺の人事異動が正式に発表されてからはもっとすごくなったよ。もう全国からで、うちはちょっとしたパニック状態になったんだ」

と、笑いながら、彼は携帯メールの記録を見せてくれた。それは彼の退職を惜しむ者たちの声で埋め尽くされていた。

「電話で涙ぐむ男子社員もいたし、ある女子社員は俺に弁護士を紹介してくれたよ。皆さんの厚い思いやりは本当に嬉しかった。ただ、いつまでも別れを惜しんでいても切りがないので、自宅の電話は留守電にして、携帯も切ったままにしたんだよ」

彼に連絡がとれなかった理由がこれで分かった。

「俺はヒアリングの一週間後に本店に呼び出され、処分の伝達を受けた。内容はお前も知っての通りだよ。それまでの間は会社に近づくなと言われていたので机の中の私物もとりにいけなかった。机の中を整理したり、引継ぎメモでも作成しようと思っ

て、誰もいない休日に、誰かに立ち会ってもらって職場に行けないか会社側に尋ねたけど拒否されたよ。まあ私物と思われるものは後で送ってきたけどね」

「・・・」

「結果として二人に不快な思いをさせてしまったことの謝罪を申し入れたけど『君の気持ちは分かるけど、絶対に二人に近づくな。会社にはもう来るな』と釘をさされてしまったよ。なにが君の気持ちが分かるかだよ。何も分かってくれていないよ。本当に犯罪者の刻印を押されて永久追放されたんだなと思ったよ」

「でもさ、処分内容はサクラさんの件だけの減給になってるぜ」

「俺の退職願いが全てを片付けたんだろう。普通は上司も監督不行を問われるもんだけど俺が一身に背負ったんで迅速に処理されたんだろうな。なにせ被害届けが出てから約二週間のスピーディな処理だったもんな。俺の勤務年数に比べれば、恐ろしく早いよ。まあリストラとはそういうものだろうな」

「リストラ？」

「そうさ。これもリストラのひとつの形態だよ。会社の建前を優先して社員個人の本音や心の傷には目を向けずに切り捨てる。お前もリストラ研修を受けると言われているだろう？」

「ああ。遠い先のことだと思っていたけどな・・・。俺たちはそういう年代だからな」

「俺も研修を予定していたけれど、今回の件で会社としては手間が省けたようなもんだよ」

「手間が省けたと言うけど、残されたお前の職場はえらいことになったんだぜ」

「全ての責任をかぶって、全てを失った男に何ができる？」

「いや、お前を責めるつもりじゃなかったんだ。ごめん」

「ヒアリングの日の後はもっぱらかかってくる電話を受けるだけだったけど、ひとつだけ俺からかけた相手がいるんだよ。それは紹介された弁護士だよ。別に裁判を起こすつもりはなかったけど念のために確認しておきたかった」

「何を？」

「この事件を法廷で争ったらどうなるかだよ。電話でのやりとりだったけど、親身に聞いてくれた。弁護士の意見としては、争うメリットはあると言っていた。結果として事件を招致した俺の責任はあるけど、情状の余地は充分ありだね。サクラさんの件では、ホテルの僅かな滞在時間や、当日二人が飲んだ酒の量は店側から客観的な証拠をとることができるし、フジさんの件も彼女からのメールの内容も証拠になる。場合によれば彼女と飲みに行った店側の証言も、本人が本当に不快に思ったのかどうかの参考になる。むしろ俺に対する会社側の対応が基本的人権に関わる問題があるようだと伝えてくれたよ。たとえ俺自身の行為が非難されるものであっても、頭ごなしに人格まで否定することはできない。争うなら弁護を引き受ける時まで伝えてくれたけど、今のところはいいいですと断ったよ」

「争うのか？」

「そんなエネルギーはないよ」

店内に懐かしいジャズナンバーが流れ、我々の会話は一瞬途切れた。ハスキーな女性ボーカルが歌う「サテンドール」だった。

「お前もいきなり会社に来るなと言われて、職場に心残りはあるだろう？」

「そりゃ、ないと言ったらうそになるよ」

「なんか、メッセージを伝えてやろうか？いろいろ言いたいこともあるだろう？」

「いや・・・」

と、言って彼は暫く考え込んだ。

「俺はずっとカッコマンを演じ続けてきたんだよ。カッコマンに縛られ、ええカッコしたいがためにこうなっちまったんだ。でも、もう疲れたよ。もうカッコよく強い男を演じることは疲れ果てたよ。あの日、会社を去った日にカッコマンは死んだんだよ・・・。何か言えといわれても、もう何も出てこないよ。出てくるものは涙だけだよ」

彼は寂しく微笑んだ。

「ひとつだけ、独り言として聞いてくれ。ヒアリングの席上、俺は部下に対して、こ

の組織は爆弾を抱えているというような作り話をして、彼女たちの気を引こうとしたと決めつけられたんだ。ペーパーにもそう書けと言われて、素直に応じたけど、俺がこれまで部下に伝えてきたことは全部真実だよ。この組織は建前の陰になって、沢山の爆弾を抱えているんだ。そのうちのひとつが俺だったんだよ。そして一気に爆発した。これまで俺は、そういう爆弾を見つけては、その弾頭をはずしてきた。そして部下にもそういう役割を担ってもらいたかった。今でもまだ爆弾は沢山あるよ。ひと知れず自爆していく者もある。会社にとって宝となるべき感性豊かな社員がつぶされていく。この組織がそういうものに目を向けようとしない限り、間違いなく増え続けていくんだよ。それは組織のマイナスになるだけで絶対にプラスにはならない」

そう言うと、彼は立ち上がった。

「ちょっと、トイレ」

「クソか？」

「そんなに飲んでないよ」

と、笑いながら便所に入った。

カップルは既に帰り、店には我々しかいなかった。彼が便所から出てくると、話題を変え、マスターも入って暫く三人で雑談にふけた。

「おう、もう一軒行こうか？」

私が彼を誘った。まだ時間は早かった。

「いや、電車があるうちに帰るよ」

「そうか。無理には引き留めない。俺はここでもう少し飲んでいくよ」

彼はジャンパーを着込むと扉に向かった。私は彼を見送るために後ろからついていった。

扉を開けると冷気がさっと顔を拭った。雪が降っていた。

「ごちそうになっていいのか？」

「今更、何言ってんだよ」

と、私は笑いながら彼の肩を叩いた。

「ひとつだけ、聞かせてくれ。なんで俺に相談しなかった？」

「お前もカッコマンだからだよ」

にやっと笑うと彼は右手を差し出した。我々は固く握手を交わした。言葉はなかった。顔に当たる雪が、互いの頬を涙のように伝わって落ちた。

彼は背を向けると、ジャンパーのポケットに手を入れて駅の方角へと去っていった。そして私はその後ろ姿を見ながら思った。カッコマンは死んではいないと。

〈了〉

「あとがき #1」

この物語を読んで何を感じとられたであろうか。

このストーリーは舞台設定、登場人物などに多少の脚色を加えているが、私の実体験をもとに書き上げたものである。

退職して社宅を引き払い、安い賃貸マンションに慌しく引っ越した直後、私は同じ夢を毎日見続けた。それは会社に行く夢であった。朝、背広を着てネクタイを締めて出勤する。会社に行くと周りから「何しに来たのですか？あなたの席はありませんよ」と言われ「すみません、すみません」と謝りながら会社を出ていく。そんな夢をほぼ一ヶ月間、繰り返し見続けた。あげくには眠ることができなくなり、座ったまま仮眠をとるようになった。そして極度のうつ状態に陥るとともに重度の女性恐怖症に襲われた。家族以外の女性とまともに会話ができなくなったのである。

そんな自分を救ってくれたのは妻であった。私が「男らしさ」を振りかざし、有能な企業戦士を極めることにエネルギーを費やしていたとき、彼女は地域の市民活動に関わり、さまざまなひとたちとの交流を深めていた。家に引きこもりがちであった私を彼女は外に連れ出し、市民活動の場を一緒に体験させてくれたのである。地方自治体の講演会や講習会などにも二人で出かけ、私も少しずつ新しい友だちができるようになった。そして今度は妻の力を借りずにひとりでそういう場に出向くようになった。そのひとつが、ある男性市民グループの集まりである。

その男性たちは私を温かく迎え入れてくれた。それまでに私が知る男社会とは上下関係が全てであったが、ここには全く違う世界があった。そこには上下の関係はなく、互いを尊重し、互いの気持ちに寄り添い、あるがままの自分を出していけるひとときがあった。このような場が存在することに大変な驚きを感じるとともに、私はこれまでに経験したことのない居心地のよさを感じた。そしてここで出会った仲間たちに自分のことを語るようになった。

会社では、あれほど流暢にしゃべることができたのに、自身のことを飾ることなく、自分の言葉で話すのは難しかった。考えてみれば、これまでに自分のことを本音で語る機会は全くなかったのである。自分の思いや感情をどう表現したらよいのか迷った。「ああ、自分はなんてしゃべるのがへたくそなんだろう」と身が小さくなる思いであったが、たどたどしい語りをみな熱心に聞いてくれた。これは私にとって生まれて初めて経験するCR（Consciousness Raising 意識覚醒）のワークであった。そしてそれは自分の内面を見つめ、自分自身と向き合い、見失った自分をさがすことの第一歩であり、「男らしさ」の鎧を脱ぎ捨て「自分らしく」生きることの始まりであった。

そのグループを中心とする市民活動に本格的に関わるようになると、いつの間にかうつ症状から抜け出ていたことに気づいた。女性恐怖症も徐々に薄れていった。そして今度は個人的な悩みの相談を受けるようになった。その殆どは「男としての生きにくさ」に喘ぐ男性たちからの相談であった。

『カッコマン・ストーリー』はそのような時期にある出版社が募集した小説のコンクールに合わせて執筆したものである。（注：2002年度小説現代新人賞 応募総数2141編 予選通過は本作品を含め127編）退職後約1年が経過した頃であった。自分の気持ちを整理し、自分自身を見つめなおすために物語風に書いたものだが、私に相談を持ちかけてきた男性たちにも資料として読んでもらうことにした。こういう生き方をした男がいることが、彼らの「自分さがしの」参考になればという思いがあった。

私に相談を持ちかけてきたひとりの青年がいた。彼は人間関係に悩み、とても落ち込んでいた。彼の話をはたすら聴くことをくり返すうちに、本人は徐々に元気になっていった。『カッコマン・ストーリー』を見せると、彼はこれをホームページに掲載することを勧めてくれた。当時、私はパソコン操作が苦手でホームページの作りかたすら分からなかったのも、彼に任せることにした。彼もさほど得意ではなかったが、喜んで引き受けてくれた。四苦八苦の末、とてもシンプルながらも立派なホームペー

ジができて、この物語はそこに掲載されることになった。

そのホームページを通して、この物語は女性の目にも触れることになり、さまざまな感想が寄せられた。女性を含め、その多くは「不運な男の物語」として同情的に受けとめたものであった。

この頃、私はこれまで押さえつけていた自分の感情をとりもどしつつあった。それまでは「男らしく」「カッコよく」「潔く」生きることに関心していた自分を責め、その弊害を語るだけであったが、「男らしくあらねばならない」という社会構造がもたらした強迫観念が男たちを縛り、身も心も侵食していく実態を知るにつれ、自分を始めとする男の「被害者性」を考えるようになった。この物語を読者が同情的に受けとめたのも、企業社会の抑圧の中で全人格を否定され、押しつぶされ、切り捨てられていく男の姿を読みとったからであろう。レイプの意思やその事実がなかったにもかかわらず、よってたかつて性犯罪者として決めつけられ追い出されたことに対する怒りを読者も共有してくれた。

その後「自分らしく生きる」ことをテーマに掲げた講演会や講習会の依頼が次第に増え、行政主催の「男の生き方セミナー」や教育現場の人権研修などでの講師役などを担うようになり、ジェンダーや男女共同参画に関わる問題を体系的に調べるようになった。男性を中心とする市民グループのみならず、さまざまな女性グループとの交流も深めるようになった。市民活動の事務局に通いつめ、メンバーとの論議を重ね、多くの文献に当たるようになった。そうこうするうちに『カッコマン・ストーリー』を資料として活用することなくなり、そのホームページも閉じてもらうことにした。

退職後、約3年が経過したとき、知人の市民活動家を通して、ある地方自治体から、男性市民のための悩み相談事業を立ち上げるので協力してもらえないか、という声かけがあった。私は二つ返事で了解した。この事業には、さまざまな顔ぶれのメンバーが集められた。臨床心理士、心理カウンセラー、教員、公務員、自営業者などなど。全員男性で、これまでに男性問題に関わる市民活動や男性の悩みをサポートする活動に長年取り組んできたベテランたちであった。男性の悩み相談の窓口は週1回の夜の時間帯に設けられ、電話相談と面接相談の二本立てでスタートした。当初、私は電話相談を担当したが、途中から面接相談も受け持つことになった。前の勤め先が損害保険会社であり、仕事が被災者の心のケアにも関わる内容であったことや、職場の人事に関わる経験などが、ここでは大いに役立った。またカウンセリングの知識や技術を一から学んでみたい、という意欲もわいてきたので、カウンセラー養成講座にも

通い始めた。そして、のちに公的資格を取得し、個人でもささやかなカウンセリング・ルームを開業することになったのである。

カウンセリングの活動が本格化すると、パワー・ハラスメント、セクシュアル・ハラスメント、ドメスティック・バイオレンス、学校内でのいじめなどで、いわゆる「加害者」と称されるクライアントの心のケアに携わることが多くなった。誰にも相手にされず、孤立感を深め、頑なになった彼らを全身で受け止めて、その頑なさを解きほぐしていく。彼らがまとう「カッコマン」の鎧が少しずつはがれ落ちると、彼らの中でたくさんの気づきが促されていく。自分が抱えていたものに気づき、それが自身のなみだとともに氷解されるにつれ、自分がどう生きていくべきか冷静に考えることができるようになっていく。その中で、迷惑をかけた周りへの真の謝罪の気持ちも生まれ、自分がなにをすべきか対処できるようになる。

そのようなことをしていると、かつての勤め先をリタイアした先輩や同僚の何人かから連絡が入るようになった。会社を離れて、彼らも私と話しがしやすくなったという状況の変化もあったのだろう。私も自分を取りもどし、落ち着いて話ができる心境になり、彼らと会ったり、書簡のやりとりをするようになった。皆、私に対しては好意的であり、あの事件に関わる会社側の対応に憤りを感じてくれていた。ただ、この事件については、私が原因で職場に迷惑をかけたことは間違いなく、とにかく機会があれば真の謝罪の気持ちを伝え、今は穏やかに過ごしていることだけを関係者に承知してもらえればいい。そのようなメッセージを彼らにたくし、私自身は、もうこの事件のことについては終止符をうつ気持ちになっていた。

カウンセリングの活動に取り組み、さまざまな悩みに触れるにつれ、いかにジェンダー（社会的に作られた性差）や権力指向の問題が産業社会に深く根を張っているかが見えてくるようになった。執筆してから数年が経過して改めてこの物語を読み返してみると、確かに縦社会の上下関係の中で抑圧に苦しむ男の姿がそこには描かれているが、その男が同じ抑圧を今度は自分がトップとして君臨する小社会の中で加えている構図も見えてくるのである。その小社会とは自分の職場であり、家庭である。

組織が上下関係の世界である限り、いくら上司が良識ある公平感覚の持ち主であっても部下にとってみれば抑圧の存在にほかならない。性別役割分業による上下関係に色濃く汚染された企業内にあっては、男であること自体が女性にとっては抑圧になる。ましてや上司であることは二重のインパクトを彼女たちに与えることになる。この物語を執筆した当初には意識していなかった社会にはびこるジェンダーや権力指向の構図、男であるが故の加害者性などが今では読みとれるようになったのである。そ

してカッコマンであった当時の自分が、その構図にいかにも無知蒙昧であったかということに気づかされた。

カッコマンとして「下の者」から慕われているとばかり思い込んでいたが、「下の者」は「上の者」に対しては無力であり、恐怖心すら抱く。「上の者」が「下の者」になにかを働きかけるときには無意識の支配力が伴い「下の者」は敵意を感じることもある。上下関係の環境の中にあっても、ひとは被害者性と加害者性を合わせ持つ。被害者であった者が加害者よりも力の強い者とつながったとき、加害者は被害者に転じてしまう。そこでは真実はなおざりにされる。下の者から慕われていると思っても真実は違うかもしれない。部下が示す親しみも、真実は自己防衛の乾いた微笑みにすぎないのかもしれない。真実がねじ曲げられていても、一番力の強い者や、その者と結びついた集団の判断が優先される。上司がいくら「対等」の関係で部下と接してきたつもりでも、優しく配慮をして彼らを守ってきたつもりでも、彼らにとっては対等ではない。上下の世界の中では力関係が全てを決定する。ときとしてそれは無自覚のパワハラになる。それは家庭内においても同様である。自分はその力を臆面もなく行使して彼らを苦しめ、また自分自身もより強い力によってねじ伏せられた。その現実には気づかずにカッコマンを揚々と演じ続けた自分の愚かさを今ひしと感じる。

「あとがき #2」

あるとき懇意にしている前職場の先輩や同僚から以下のようなことを言われた。

「職場では本当のあなたのことを知らないひとたちがいる。あなたが謝罪したいという言葉は彼らは『やはり罪を認めたんだ。あのひとは精神的におかしくなり、とんでもない性犯罪者になって女性たちに襲い掛かったんだ』と受けとめているので、とても悔しい」

そのように自分を弁護してくれることに私は恐縮し感謝した。何を言われようと、自分としてはもうどうでもいいこと。そんな気持ちを彼らに語り、気にはしていないことを伝えた。

ところが、このことを親しくしているカウンセラー仲間に伝えたところ彼はこう言った。

「謝罪や感謝の気持ちは大事なこと。でもあなたは自分の本当の気持ちを伝えていないのではないか。それは怒りや、悔しさ、悲しさであるかもしれない。それを表現せずに謝罪という言葉で、あなた自身の気持ちにふたをしてしまうと、周りにはあなたの真意が伝わりにくい。あなたが遭遇した事件はあなたにとっても職場のひとたちにとっても大変な出来事だった。長年会社に尽くしてきたあなたが退職の決意を固める

ほどの事件だった。それだけにかつての職場のひとたちはあなたに真実を語ってもらうことを願っているのではないか。真実を踏まえた自分の気持ちを語ることはあなた自身を楽しみ、周りへの理解にもつながるのではないだろうか。ひょっとしたら今のあなたは謝罪という言葉でカッコつけているのかもしれないね」

この指摘に私は愕然とした。自分ではカッコマンを卒業したと思い込んでいたのが、実は小説最後の言葉通り「カッコマンは死んではいない」という指摘を受けてしまったのである。

それから暫くして、先の青年に久しぶりに再会した。以前よりもはるかに元気になった彼に、この「内在するカッコマン」のことを伝え、ブログにカッコマン・ストーリーを再掲載することを提案してくれた。私はブログをしていないので彼がブログを開設し、このストーリーに「あとがき」という形で付け加えることで自分の気持ちを語ってみてはどうかと言う。

会社を離れてから6年以上が経過した（註：2001年8月退職）。あの職場では、あの事件は風化して、知る者も少なくなっただろう。ここで改めて自分の気持ちを伝える時期に来ているのではないかと考え、彼の提案を了承した。

ひたすらカッコマンを演じ、そして退職後も演じ続けていた自分は、この事件の唯一の解決策は、会社の一方的な判断に従い、自身が全ての責めをかぶることであり、それが残してきた同僚たちを癒し、職場の平穏をとりもどすことになる信じてやまなかった。しかし、そのことが自分を性犯罪者であることを肯定したとみなされるのであれば、それは全面的に否定する。私は精神的におかしくなったわけでも性犯罪者になったわけでもない。性的関係の事実や、それを強要したこともない。そのことは当事者である女性本人が最も承知していることである。

この事件は私が原因で起きたものであることは認める。しかし100%責任を負うものではない。

糾弾の場に追い込まれたとき、周りは見事なくらいに自分と距離をおき、私は完全に孤立した。当事者そして糾弾関係者は私を追放することに集中した。そして完全に力を奪われた私は彼らの思惑通りに去っていった。

そんな状況から自分をとりもどして立ち直るまでの日々は実に苦しくて辛かった。彼らに対する訴訟の提起を何度も真剣に考えては打ち消してきた。いつまでも根にもってはいけない。過ぎたことは忘れようと。でもはかり知れない「悔しさ」、そして関係者に対するとてつもない「怒り」「憎しみ」「恨み」の炎は今でも心の奥底で燃え続けている。

これは一生抱き続ける感情であるかもしれない。ただ救いなのは、今ではその感情に寄り添ってくれる仲間たちがいること。そして私自身がその感情を受け入れ、自分に寄り沿い、気持ちをコントロールしながら充実した人生をおくることができているということである。この実体験は私が行なうカウンセリングの中でも大いに活かされ、多くのクライアントの救済につながっている。

このストーリーがホームページに掲載された当初の原文では、当事者である二人の女性達のイメージに触れる箇所は極力制限した。なにか自分が責任回避をするようで「男らしくない」というような気持ちを抱いたためである。しかし、あれからかなりの年月が経過した。もうカッコつけて彼女達の擁護に徹することもなかろうと思い、ブログに再掲載するにあたっては、若干その辺を踏まえた表現の修正を施している。より事件の「真実」に近い描写になったかと思う。

退職して間もない頃、物語にも登場する上司から簡単な手紙がきた。私が退職時に彼に差し出した挨拶状に対する返事だった。その中に「事件のわだかまりは時が解決してくれるだろう」という言葉が記されていた。

私は断言する。時間の流れだけでは、わだかまりは絶対に解消しない。いくら年月が経過しても、その事件の真実に向き合わず、他人に責任をなすりつけるだけで自分の行為を振り返らないかぎり、わだかまりはそのひとの中で一生くすぶりつづける。それは潜在的な罪悪感として死ぬまで重くのしかかり、引きずることになるだろう。そこから解放されるためには、責任を課しすぎた者に対して、そのかぶりすぎた部分について謝罪の言葉を述べることである。

私は自分の体験と「気づき」を今後も伝えていきたい。それがセクシュアル・ハラスメントの問題だけに限らず、あらゆる人権問題の根底にはびこる理不尽な力関係の構図の中で苦しむひとたちを救い、支えることになればと思っている。

〈あとがき 了〉

追記

ちょうど、このあとがきを書き終えた頃、二人の女性から印象に残る話を聞いた。

そのひとはカウンセラー仲間で、私が勤めていた会社でメンタル相談の窓口を現在担当している方である。彼女が言うには、この会社では挨拶すらできないと。日常の普通の挨拶でも、彼女が声をかけると「声をかけられた社員が心の問題を抱えていると思われるのでやめろ」とたしなめられるのである。それも会社の中枢を担う管理

職たちからである。長年医療関係に携わっていた当人は、ここまで自分の本音を押さえて周りの評価を異常なほど気にする有様に危機感をつのらせている。私が在籍していた当時よりもさらに社内の病的環境は進行したようであり、益々多くのカッコマンを製造しているようである。

もうひとりの女性は、夫が私のクライアントとして継続的にカウンセリングを受けに来られている方である。夫婦間のトラブルで悩んでいた。夫が変わり始め、また夫婦の問題を相談できる場所ができたことで彼女も救われたというお礼の言葉であった。とても嬉しくなった。男性問題は女性問題。女性問題は男性問題であることをつくづく思う。（註：追記 2009 年）

〈完〉

吉 岡 俊 介